

タカハシホタテ

Fortipecten takahashii (Yokoyama)



地質標本館の第4展示室には、ホタテガイの仲間の化石がたくさん展示されています。中でも鮮新世のタカハシホタテ (*Fortipecten takahashii* (Yokoyama)；北海道雨竜郡沼田町産) が一風変わった形をしていて目を引きます。現生のホタテガイの殻は左右2枚とも比較的膨らみの弱い扇のような形をしています。タカハシホタテでは右の殻がまるでお椀のように膨らんでいます。左右の殻とも厚みを増し、丈夫でずしりと重量感があります。

殻の成長の仕方を調べると、孵化後2年目くらいまでは現生のホタテガイと殻の厚みや膨らみにあまり違いがないことから、現生種同様に危険を察知すると殻をばたつかせて泳いで逃げる事ができたようですが、それ以降の数年以上の期間は殻を厚く丈夫にすることで泳いで逃げることをやめ、膨らんだ右殻を海底に埋めて左殻を蓋のようにして生活していたようです。殻のサイズに見合った大きな貝柱を持っていましたが、“運動”をやめたためにもし食べてみたら美味だったのではないかと想像されます。

本種は、1930年に東京帝国大学横山又次郎教授により命名記載されました。当時日本領であった樺太(現サハリン)の大泊中学校教師、タカハシ(S.Takahashi)氏と生徒達が集めた化石を研究材料にしたことから *Pecten takahashii* と献名され、その後丈夫な(=ラテン語forti)殻を持つ本種を模式種として *Fortipecten* 亜属が新設されました(その後、属に格上げ)。なお、同時期に、仙台周辺でたくさん出る同種の化石を研究していた東北帝国大学矢部長克教授は、地質調査所の初代所長であった和田維四郎の名を冠した新種名で論文を準備していましたが、横山教授の研究論文が先行したため、手記で止まり論文公表には至らなかったようです。結果的には「ワダホタテ」とはなりませんでしたが、地質標本館にも浅からぬ因縁のある種です。

タカハシホタテは、地層の時代と古環境も示唆する重要な化石です。詳しい研究紹介も含めて次の文献を参照してください。中島 礼(2007)タカハシホタテっていったいどんな生物?. 化石, no.81, p.90-98. (地質標本館室 利光 誠一)